

## 図書館だより

53

①中村圭介他編『ホワイトカラーの仕事と成果』東洋経済新報社 (ix+282頁,A5判)  
ホワイトカラーの仕事とはなにか。ゴールドカラー、グレイカラーという言葉もあって意外と判然としない。ホワイトカラーの生産性や成果主義が議論されているが、著者たちは、「管理」を切り口にその実体に迫ろうとしている。それが成功しているか疑問はあるが、ホワイトカラーの仕事研究の重要な端緒であることは間違いない。

②松繁寿和他編著『人事の経済分析』ミネルヴァ書房 (vi+271頁,A5判)  
大学を卒業してある企業に就職し、その企業で定年を迎える人は2割位でしかないと言う。本書が主張するように、マラソン型競争メカニズムからコースアウトする人が大半なのである。人事制度を職務、職位、賃金の配分ととらえたとき、労使ともに納得する組み合わせとはどのようなものなのか。個々の企業ごとの模索は続く。

③稲継裕昭著『公務員給与と序説』有斐閣 (vi+220頁,A5判)  
巷間、公務員給与が話題に上ることが多い。優秀な公務員の募集、財源、社会的・倫理的な考慮の必要性などの諸条件を満たす公務員給与とはいかなるものなのか。日本の公務員の国際的位置付けに加えて、本書で分析されているように、歴史的経緯も確認しておく必要がある。公務労働の需給双方の納得を得るためである。

⑦福西淳著『地域社会での定住外国人支援』明石書店 (253頁,B6判)  
⑧尾西正美著『日本式人事・労務管理の栄枯盛衰』学文社 (302頁,B6判)  
⑨塚田広人編著『雇用構造の変化と政労使の課題』成文堂 (253頁,A5判)  
⑩高沢武司著『福祉パラダイムの危機と転換』中央法規 (vii+222頁,A5判)  
⑪小杉礼子編『フリーターとニート』勁草書房 (viii+216頁,B6判)

(新着受け入れ図書の詳細は、当機構ホームページの「労働図書館」内「新着図書情報」をご覧ください)

④月刊進路指導編集部編『私の仕事』実業之日本社 (414頁,B6判)  
「65人の職業人(プロ)の足跡」との副題がついている本書は、5年半にわたって『月刊進路指導』に連載された各界の著名人の「私の選んだ道」を6章に編集したものである。日本には3万とも言われる職業があるが、それぞれの人が仕事を決めたいきさつも千姿万態である。人生いろいろ、仕事の決め方もいろいろなのである。

⑤宮地光子監修『「公序良俗」に負けなかった女たち』明石書店 (536頁,B6判)  
住友電工、住友化学の男女賃金差別裁判を扱った本書は、本文477頁の大作である。「憲法違反ではあるが公序良俗違反ではない」との一審判決をくつがえすために裁判闘争を闘った記録は、まだ性別役割分担意識が広範に存在すること、女性たちの血と涙なしには男女平等は根づかない悲しい現実を明らかにしている。

⑥森ます美著『日本の性差別賃金』有斐閣 (x+332頁,A5判)  
日本の男女間賃金格差が大きいことはよく知られているが、その改善のテンポが韓国やアメリカに比べてさえも遅いとは驚きである。同一価値労働同一賃金は自明であり、理由なく男女間に職種、就業形態に違いがあれば改善を図るのは当然である。本書はその当然の行爲も可能性を分析しなければならないことを示している。

⑫居神浩他著『大卒フリーター問題を考える』ミネルヴァ書房 (ix+298頁,A5判)  
⑬辻村みよ子他編『日本の男女共同参画政策』東北大学出版会 (iv+388頁,A5判)  
⑭神谷治美他著『女性の自立とエンパワーメント』ミネルヴァ書房 (vi+239頁,A5判)  
⑮面地豊著『労働時間をめぐる歴史と現在』千倉書房 (v+154頁,A5判)  
⑯久本憲夫他編『企業が割れる！電機産業に何がおこったか』日本評論社 (205頁,A5判)

## 今月の目次情報

二〇〇五年七月一日現在の当館の蔵書数は一四万三六四〇冊である。労働専門図書館としては国内有数の規模であると自負している。都立日比谷図書館の〇三年の蔵書数は約一三万冊、小才の地元の南千住図書館の蔵書数も同程度である。一つの公立図書館並みの規模に達しているのである。ちなみに、国立国会図書館の蔵書数は八〇〇万冊と言われ、世界最大の図書館であるアメリカ議会図書館(LOC)は一億冊の蔵書数を誇っている。一つの本の厚さを一cmとしても、その背幅の総延長は一〇〇〇kmともなる。一時間に四km歩くとして、書架をただ通りすぎるだけでも二五〇時間、一〇日以上を要する。ただ、書架は五、六段になっているので、実際上は二日ほどですむであろうが。また、これも単なる計算でしかないが、LOCの蔵書を一冊あたり五分手にとってみるだけでも、不眠不休でも一〇〇〇年かかってしまう。インターネットが栄え、四六時中テレビ・ラジオの放送があつたとしても、これだけの本が出版されるのは、情報の信頼性では図書に優る媒体がないからである。匿名で発せられ、証拠が残らない状況のもとでは、信頼される情報は蓄積されない。一部に「とんでも本」は存在するが、最終的な情報源は、人類の偉大な発明品である。

図書である。本がなくなることはない。しかし、図書館もなくなることはない、と大きな声で言えない状況にあることは悲しいことである。

## 図書館長のつぶやき

平成一六年度の当館の洋書購入冊数は二八九冊である。洋書も、取次業者の刊行リストや当機構の研究員等の要望によって選書・購入しているが、労働関係の洋書を体系的に収集しているかとなると、いささか心許ないところがある。和書であれば、著者や出版社(者)、タイトル等をみればある程度の感触がつかめるが、洋書となると小子にとっては著者、出版社をみても五里霧中の状態である。図書の収集が弱いとの来館者アンケートのご指摘もある。そこで、拱手傍観できないのであるが、蔵書構成上の不備は、現在のところ、当機構の研究員の見識と図書館間貸出(ILL)に頼る以外に方法はない。どのように当館が所蔵すべき洋図書を収集していくか、目下の悩みの一つである。どなたかアイデアをお持ちの方がいらつしやれば是非教えていただきたいし、お読みになりたい本を当館が所蔵していないければ、「みんなの声」(意見箱)で要求していただければ幸いである。皆さんの要望にお応えすることによって、少しずつでも改善していきたいと考えている。

当図書館は、社会科学関係書を中心に和書97,000冊、洋書25,000冊、和洋の製本雑誌20,000冊を所蔵している労働関係の専門図書館です。労働関係の分野には、労働法、労働経済、労働運動、雇用職業、女性労働、パート派遣、高齢者労働、障害者労働、外国人労働、社会福祉などがあり、これらで、蔵書の半数以上を占めています。その他にも、経済書をはじめ経営学、心理学、教育学、社会学など関係分野に及んでいます。また、和雑誌(490種)、洋雑誌(220種)、紀要(450種)、組合機関誌・紙についても、受け入れています。

特色としては、厚生労働省をはじめとする官公庁発行の統計類などの逐次刊行物、日本経団連など経営者団体の刊行物や民間研究団体刊行物、社史があり、労働組合に関しては、労働運動史、ナショナルセンターや産業別組合の大会資料などを継続的に収集しています。洋書については、特にILO(国際労働機関)総会の議事録やOECD(経済協力開発機構)の刊行物、各国政府の労働統計書などを収集して閲覧に供しています。特殊コレクションは、戦前・戦後を通して労働組合の歴史的に貴重な原資料を収集、保管しています。

開館時間:9:30~17:00

休館日:土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始(12月28日~1月4日)、その他  
電話番号:03(5991)5032/FAX:03(5991)5659

利用資格:閲覧はどなたでも自由にできます

貸出:和書・洋書とも2週間、5冊までです

※身分証明書(運転免許証、健康保険証など)をお持ちください

レファレンスサービス:図書資料の所在調査などのサービスを行っています



ご案内  
労働図書館(資料センター)